

翻字『奥州征伐記』(六)

藤沢 毅

A Reformation of “Oshū-Seibatsuki” (6)

Takeshi Fujisawa

前号に引き続き、『奥州征伐記』を翻字していく。この作品の成立問題などについては、拙稿「『絵本平泉実記』の典拠」（『文教国文学』38・39合併号 平成10・2発行）に少しく触れてある。

底本略書誌

架蔵本。文政十年写。大本十卷十冊。

縹色表紙。左辺題簽、墨書で「奥州征伐記」。

見返し、序、総目録、なし。扉題「奥州征伐記」。

凡例

- ・私に句読点、濁点、「」「」を補い、また段落を設置した。
- ・本文中には平仮名、片仮名ともに使用されているが、特別意図的に強調されている箇所を除き、平仮名に統一した。
- ・今、氏などは、それぞれ「より」「とも」(あるいは「ども」と直した。「こそ」の意で使用している「社」は「こそ」に直した。
- ・一文字の繰返しは、平仮名の場合「ゝ」「ゞ」、片仮名の場合「ッ」「ヅ」、漢字の場合「々」にした。複数文字の繰返しは、三文字以上

でも「く」に統一した。

漢字は、多少の例外を除き、基本的には現在通行されている字体に統一した。

・明らかな誤写もそのままの形で出し、右に（ママ）と付注をした。ただし、意味が不明確になる場合は該当箇所の下に（ ）で正しい形を置いた。欠字の場合は「」で補った。

・いわゆる「一見せ消ち」の状況は採用せず、修正後の形のみを記した。
・明らかに脱文がある場合は、その箇所（脱文あり）と記した。

・文章中には、人権上問題のある表現も含まれているが、作品の成立時代の文化背景によるものである。その箇所もそのまま翻字したが、稿者の意図的なものではなく、学問上の措置として了解されたい。

奥州征伐記
(見返し貼付け丁表)

拾本之内 武清（見返し）

奥州征伐記 卷之第六 目錄

- 一 感神院別當鎌倉御陣へ参る事
- 一 川田八郎愛心大手破るゝ事
- 一 北条義時先陣利を失ふ事
- 一 江間義時敗北父時政憤戦して敗軍の事
- 一 并 和田義盛嘲弄する事
- 一 工藤祐経和田を諷す 義盛直言の事
- 一 并 和田義盛合戦勝利の事（一才）

感神院別当鎌倉御陣へ参る事

文治五年、京都感神院別当を奥州の御陣へ招かれんが為、其頃天下第一の馬乗りと聞へし近藤七国平を御使として馳せ登せらる。是川田八郎を味方に付んとの謀事也。

此感神院と申は、比叡山三千第一の僧にて、則今の祇園の社は是也。爰に神書天文を開き見るに、天照太神の御時に背き随はざる邪神をば、素戔嗚尊を以て滅ばさしめ玉ふ。是等をイブリの神と号し、今四天二王等の足下に踏なへ玉ふ天の邪鬼と云ものは是也。彼の邪神共を（2オ）イブリの神と号する事は、太神宮の御心に随ひ奉らず、我儘なる神成る故に、仍て是を名付く。末代の人に随はざる者を指てイブリ者と云へる訳、此故也。素戔嗚尊と申て、御身の丈一丈にして力強く鼎を上て遍く邪神を従ひ給へ、或は八ツ頭の大蛇を切らしめられ、或は槌が姫稲田姫を以、妻とし給ふ。是よりして我朝、武の始り也。去れば伝教大師、桓武天皇と御心を一つにして今の京平安城を定められ、帝都の鬼門に当て、此比叡山を開かれ、帝都鎮守の若山なれば、素戔嗚尊を以、三千第一の神と（2ウ）崇め玉ふ。然れば山門王城祈る事有時は、此感神院の御輿を王城へ振り入奉る。此時今の祇園の社は今宮の祝ひ奉りし祠也しか共、感神院の御輿下り給ふ時、先づ此社にて休め奉る。又内裏へ御輿を振り捨奉る事なれば、是を戻し奉る時にも先今宮へ入置奉ると御台所と名付。斯の如く一所に此社に置奉りしに、三千第一の御神也とて貴賤是を尊びける程に感神院の神意重し。今宮太神宮の有か無かの如くにて、俗に云「借屋を貸して本家を取られたる」様に也玉ふ（3オ）により主の尊、今宮の社を他所へ遷したりと雖、今に祭祀の時、祇園の輿より先きに今

宮の櫓を渡し奉るは此故也。然れば迎、感神院の御社を祝ひ奉る程ならば、播州広峰に御座す御正体を招き奉るべし迎、則、是を播州より渡し奉る時、播州難波に着せ給ふ。今宮の社広田大明神は是播州の惣社なれば、此社に御泊り有て、是より京都へ参らするに仍て、今に祇園を播州木津難波より御輿を昇きける事は此時より始る。夫よりして弥々感神院の社繁榮せしかば、則、是に（3ウ）別席を定められ、世々絶る事なし。然るに奥州川田八郎と云は、基衡の爲には孫にて、秀衡が甥也。又、八郎に一人の兄有り。是は生付て手足欠損し歩行も人の如くには働かず、股屈まつて自由ならず。斯如くの不仁者なれば、惣領なれ共、武士の家継事叶ふべからず迎、次男川田八郎に家を継しめ、兄の支離者を秀衡京都に伴ひて、此感神院の別当を金を以、買求め、勤る事無かりしかば、秀衡我甥の事なれば不便に思へ、且は我国武運長久を祈らしめんと、多くの金（4オ）にて買求め、彼者を別当となしけり。

頼朝卿此人を召寄せて、彼の八郎を賺して身方に付んとの謀事に仍て、彼の近藤七国平を京都へ登せ、感神院別当を呼下し、国平天下第一の馬乗りなれば片道を七日に馳せ登り、別当へ上意の赴を述るに、感神院別当たりと雖、將軍の御威勢には一言の異義に及ばず、国平と相伴て奥州の御陣へ参上せしかば、義盛則、対面して、

「泰衡は足下の一門と云乍、既、朝敵の名を得たり。然るに感神院と申は、素戔嗚尊（4ウ）にて我朝の武神也。且は王城守護神として天子へ弓引者を罪せざらんや。仍て御自分舍弟八郎に異見を加へ、味方に招かる、に於ては、兩國の支配、八郎に任せ、御自分へも御恩賞を厚く給はるべし。一ツは禁庭への御奉公成るべし」

と賺し申に仍て、別当、八郎に対面して再三賺し諫めける故、元來其志し有ける事なれば、舍弟の別当斯如しと申せしかば、川田終に一門に背き、鎌倉殿へぞ合体を仕たりける。

仮令別当个様に申共、其身既、家の惣領に立て秀衡が大（5オ）恩を

受、大祿を喰み乍、一時に心を変じける事、人倫に比すべからず。朝敵の名蒙り、殊に父が命に背き、終には亡ぶべきものと、速に其罪有れば、我身彼の家を納め、先祖祭りをなさんと思ふよれるか。然れば頼朝御出馬以前に心底を述べべきに、今此時に至ては取るに足らず。斯思へも寄らざる事なれば、大手既、破れける。泰衡が不義、天恵み給ふ故か、又、素戔嗚尊の神力によりけるにや。

川田八郎愛心 大手破る、事（5ウ）

諸川田八郎、二品の方へ申越けるは、

「此大手の要害は、御覧の如く甚だ堅固にして、外より責るには百年を経る共中々落べからず。某一ツの秘計を廻らし是を破て進らせ申さん。此所さへ破りなば、仮令本城へは幾重有る共、攻入給ふ事安かるべし。

此砦破り次第、某に於、四十万石の大名なれば、私の居城厨川の柵へ籠り御味方に力を合せ申さん。今宵、鎮て後、御家人の内にて物馴たる輩を五百人勝りて大手の木戸口迄遣はさるべし。某、能時分を考へ、内より朱の提灯を出すべし。其時、（6才）櫓の下へ寄せ候らへ。密に門を開き、人を引入て、一時に火を放ち、焼落し申べし」

と、約を成して城を落さんとす。則、其輩を撰ばるゝに、我こそ城内に入申さんと云人一人もなし。是、八郎が心底を知らざれば、疑ひをなすに仍て也。義盛が曰、

「是にては事成るべからず。某に於は仮令千騎万騎にて取巻共、慥に切抜て帰るべき間、某先一番に城中へ入べし」と云しかば、各々是を聞て、

「義盛斯云へしは、扱は慥に通る、事を知りたるにこそ斯は云成るべし。然らば我等も入べし」

と進み出ければ、則、義盛を大将（6ウ）として、三浦の一党数を尽し、

或は江戸・川越の輩一人当千の人々を五百人撰み出す。二月廿五日の夜半計りに大手の寄せ手、相図を待に、程なく櫓の上より朱の提灯出ししかば、各々木戸口近く寄たりければ、内より小門をひらき、五百余人を密に通す。義盛、八郎に対面して、渠が指図に任せける。各々方々へ走り廻て六十余个所へ火を放ちければ、「やれ夜討よ」と云間もなく、上を下へと返す所を、川田八郎が手勢二万余騎、案内は能知りたり。爰に火を懸ては（7才）彼所に関を作り、彼所に関を合せては、鉄石を以、堅めし要害堅固にして、爰に火を放つ。然るに一ツの砦、忽ち灰燼と成て破れけり。

鳥海四郎季衡は、大手の大将軍乍、川田が愛心を夢にも知らず、是天命とは申乍、薄情かりける次第也。鎌倉の御家人と川田が手勢に味方を討たれ、季衡を始として防がんとする者なく、声々に二の砦へ逃入ける。敵さしも心を尽せし一ツの砦を手も滞さず打破り、悦ぶ事限りなし。大手、既、破れしかば、川田八郎城中（7ウ）委細の絵図を頼朝卿へさし上、其身は岩井郡と樋打郡の堺成る厨川の柵へ引籠る。其勢三万余騎で、剩、究竟の要害なれば、攻ると云共、三日四日には落べからず。其外に鎌倉の大勢は、合戦の最中に構ひ内より起り、さしも奥州第一の要害にて、いか程攻る共破れまじき函谷関の如く頼みし大手の一の木戸、一時に焼失たり。去るのみならず、秘する所の城中の絵図を川田が敵に与へしかば、義盛等、先、水の手を留め、水門毎に番を付て、大手の焼迹へ陣を（8才）取て、追付、本城を攻んと進みける。鳥海四郎季衡は面目なさに内に入て泰衡に面を合されず。泰衡も大に怒て是を免るさず。高衡も「兄乍云甲斐なき者也」と更に兄と思はざれば、季衡は兄弟に疎まれ、既、手勢三万余騎を率して樋打郡村方の柵へと引籠りける。

斯て高衡搦手へ向けれ共、大手へ又呼返せしかば、高衡が曰、
「此度は泰衡直に向わせ玉はずは叶ふべからず。仮令御身武勇ならず共、両国の主将なれば、軍兵皆大将の御前にて死せん事を思へ、軍に勢ひを

出すべき也。(8ウ)早く入らせ玉ふべし」
と進めて、其身は士大将として万事を支配し、泰衡直に大將軍と成て大手へぞ向へける。

北条義時先陣 利を失ふ事

文治五年四月二日、泰衡、高衡を相見し大手へ出ると雖、既、究竟の要害攻落され、剩、頼切たる大手一の木戸破れしかば、泰衡専ら心細く成て、

「此上は弓の弦はづし、箆を卷て鎌倉殿の御陣所へ参じ、一所懸命の地を給はん」

と云ければ、一座の輩、是兩國の安否なれば敢て詞を出す人なき所に、舎弟樋爪五郎高衡両眼より(9オ)はら／＼と涙を盈して申けるは、

「コハ口惜き仰也。先祖武則真人より已来、人の下に立し事終に聞かず。武則、又將軍と心を合せ、安部の貞任等を討し事は、全く此方より望て追討使の命に随へしにあらず。安部の頼時勅命に背きしに仍て、鎮守府將軍源の頼義朝臣、節度使を給はつて当國に進発すと雖、彼頼時が子に貞任・宗任等其勢ひ甚だ強く、既、九十年が間合戦挑むと雖、未だ更に落ず。官軍終に引色に成る間、將軍、詞を厚くして当家を混に頼まる、に仍て、武則真人等官軍に合体して、朝(9ウ)敵貞任・宗任を亡す。其軍功に仍て、頼義朝臣是奏許して、武則真人を鎮守府將軍兼陸奥守兩國の押領使に補せらる。

然るに父が遺命に背き、兄弟皆朝敵の名を受ける事も是、天此家を亡す時来るなれば、今更轟ぐべきに非ず。源家は頼義・義家等、當國に於、前後十二年の戦ひをなす。是、合戦の間而已にて、其乱に及ぶ事廿余年を経たり。其軍功類なきに仍て、源家の威光輝きしか共、為義・義朝に至て、家衰へ、一頃は源氏と云名をさへ忘れぞかし。平家又僅(10オ)

に世を繼て廿余年にして悉く亡す。当家は先祖より二百余年、兩國大に治る事、是より久しきは有べからず。斯如く、父入道の世迄は平安にして、今此難に逢ふ事も兩國、既、地を替べき時節到来する所也。其上鎮守府將軍たる者、征夷將軍の幕下に属せし事、其恥辱譬ん方なし。併し夫共に、越王勾踐は吳王夫差の軍門に石癩を嘗ても終に其仇を報へし如く、目当有て一旦の恥を凌ぐ共、其功を立、名を揚べきと思はゞ降参すまじきにも非ず。然れ共、此大軍(10ウ)を引受、係る名城に籠てさへも功を立ざる我々が僅に一所の地を領し、有か無かの身とならば、逆も無念を晴すべき期非ず。

其上彼の頼朝は先達、起請文を送てさへ、其約を違へ當國を攻る程の無道者にて、高衡度々恥辱を与ゆると雖、敢、夫れを恥共思はず、既、平家渠を助け、我を亡さる。是平家の白痴成る故也。敵の末は仮令幼稚たり共是を免すべからず、と云て平家の門葉悉く根を断て葉を枯せしぞかし。夫れの而已ならず、木曾義仲子息清水の冠者、幼少にして然かも我婿(11オ)なれ共、速に殺害し、或は肉親を分たる九郎義経を討、又現在の叔父を亡す事、浩る無徳なる者にして、況や我々を助置べき様はなし。降参せしを幸にして我々を禁じて京・鎌倉を引渡し一門を並べ置て首を刎られん事、誠に口惜き次第也。然れば当城を枕として悉く討死して、末代の物語にも、奥州の合戦は何今年懸り天下の勢を引受、最期に目を驚かせし杯云はれん事こそ、弓矢取る身の面目成るべし」

と強ちに是を申ければ、泰衡以下の一門、其余の輩迄も此義に同じ(11ウ)ければ、今は中々討死と思へ定めたりしかば、誰を恐れん方もなし。父入道の廟所の前にて一紙の起請文を書、「御遺命に背くと雖、今に到ては又一門の輩、偏に討死を志し候へば、一人も生残るに於は其罪を行ふべし」との赴を書乗せて、一門連名の血判をし、是を墓下に築込み、各々神水を吞て、「此上は招く共降るべからず。然れば此度の合戦は大事の戦ひ成るべし」と也。人々其旨を心得べき由を申渡さる。城中の輩は

死を一戦に極めし事なれば、先、泰衡が妻子、或は高衡が女房一門、老中等の城へ送り遣る。是（12才）最期に心を動かさざるの爲也。何れもの妻子迄も悉く心を引かされぬ様に潔く討死せんが爲、誠に能も計らへし物也。渠平泉の軍、手ぬるかりしは、舟中に女中を多く乗せし物也。楠先生正成は妻子を吉野の奥、勧進寺に隠し置て、千早・赤坂には一人も女を入ず。去ればこそ大功を顕はし、斯、末代迄名將と徳を称したり。女の陣中に禁する事、漢家・本朝共に定る法也。泰衡等の心の内、甚だ以、能はりける。

去程に同三日に也しかば、大手の先陣、畠山治郎に、小山三郎、佐原十郎、真先に進み、関を作る。高（12才）衡が曰、

「今度に於ては泰衡直に合戦を遂らるべし。大將軍出玉は、諸軍勢も勇みをなし、一入戦ひも能すべし」と進めしかば、泰衡心得、

「去らば打て出ん」

と、紫系威しの鎧を着し、同色の甲の緒をしめ、紫の総角アツマケを後ろ中に結び下げ、是大將軍の印也。其身は藤原氏なれば出立は悉く紫也。旗は紫地、竹に雀書たると三ツ引きを書たると二流れ、真先に押立させ、八万余騎を引率して四方の門を開かせ、異成大將軍なれば、一門馬の前後を囲み、「鎮守府將軍兼陸奥守藤原の（13才）泰衡」と名乗て、喚て懸る。爰に江間小四郎義時は、何ツも二品の御側に在てさしたる軍をもせずくらされしに、御前に進み出て、

「義時御陣中に有り乍、斯迄合戦をも仕らず。只君御大事の軍と覚ゆる時、罷出べき志し有ての事也。今日は敵も宜く候らへば、馳向て義時御先を仕り候らはん」

と申されしかば、父北条四郎時政云は、

「先（戦）場に君の礼なし。高名は仕勝也。尋奉るに及ぶべからず。北条は先を懸んに、誰れかを是を留むべき。急ぎ向て戦ひを遂べき」よし申

さる。是、御舅成る故に仍て、甚だ其（13才）詞奢れる也。

然れば二品も「一番驅て見るべし。併し足下の手廻り計りにては覺束なし」連、狩野介宗光、常陸治郎為義、武田兵衛有義、相模守雅義、駿河守義助、伊沢五郎信光を差添らる。是皆当家の一門と云、新羅三郎の御流れ、甲斐源治（氏）の正統、日本一の勇士共也。是等の軍勢、都合六万余騎を引率し、我婿なれば畠山重忠の加（扣）へたる所に、重忠声を上て申さる、は、

「鎌倉殿御一代の先陣は此畠山に仰付らる、所也。然るに各々先陣に進る、事（14才）いかに」と云。義時の曰、

「今日御前に於、先驅を給はる」

とて打笑て行しかば、重忠大に立腹す。畠山が郎等、本田・半沢是を留めんと逸りければ、重忠の云、

「よし、直な事は仕出すべからず。其儘に捨置べし」

とて、我陣を堅めて見物す。重忠斯如くにして伴なはざりし程に、同く北条の婿なれば、稲毛三郎重成を先陣とし、北条の六万余騎は奥州の八万余騎に入乱れ、入違へ、火の出る程こそ戦ひけり。此方は名匂ふ甲斐源氏の勇士なれば、六郡第一の荒武者共にて互に引ず、（14才）退かず攻戦ひば、死骸を積んで岳をなし、血は流て江河の如し。去れ共、大將泰衡は生れ付て大悠にして、一二万の大將にはよりしか共、八万余を廻すべき器量に非ず。殊に出生して以来、今日初めての合戦なれば、驅引支配を知らず。寄手はさしも名を得たる武田・伊沢・小笠原の輩、甲斐源氏の勇將、面々に應配取て下知せられしに、義時兵を励し、「懸れ」と下知せらるれば、勝に乗たる鎌倉勢、切立る間、泰衡が八万余騎、暫時に打ちられ、馬の足を立兼たれば、（15才）泰衡、軍勢を引入らんとすれども、八万余騎なれば倦み果、入る事を得ざる所に、軍大將樋爪五郎高衡、城中より遙に此体を見て、「是は駄馬に荷が過たり」と

頭を搔て居たりしが、「先、軍勢をくり入らん」と、五百余騎にて駆出たり。軍兵共は是を見て、「高衡こそ出玉へり」と悦び勇んで色を直す。さしもの甲斐源氏の人々も高衡と云声に恐れをなして進み得ず。其時、高衡、

「勝は謀事也。大を以、小に勝るは常の事。敵の勢は六万余騎、味方は八万余騎持乍、各々二の足を（15ウ）ふまる、事不思議なれ。但し討死を思へ極め、起請文を書、神水を呑みしは偽り成しか。死を一地に極るからは何かは更に恐るゝに足らず。進めや者共」

と下知すれば、軍勢、大に力を得、鎌倉勢を物の数共思はぬ様に也しは、八陣遁甲に勢を作て、高衡一揉みにせしかば、さしも氣に乗たる鎌倉勢の備なれ共、只一戦に蹴立られ、古簾の如く破れたれば、二品是を御覧じ、「義時討たすな。新手を入替よ」と仰遣はされければ、横山権の頭、吉川小治郎、上総介高弘、信濃守遠光、（16オ）遠江守義員等、各駆付け共、勢の重なる程、猶、陣々掻き立て馬の足並取次に見ゆれば、高衡、泰衡に指向ひ、「早々御勢引立られよ」と云へしかば、泰衡、則、木戸に懸上り、軍勢を繰り入るゝに、四万余計の軍兵入りけれ共、泰衡は未だ入らず。各、是を見て、「先、大將軍には御入有れ」と進むれ共、「汝等先ず引入るべし」迎、門外に控へければ、高衡、「何とて泰衡には御入なきぞ」と、使を走せけるに、泰衡涙をはらゝと流して、

「我適々戦場に出たりと雖、散々に戦ひ仕損じ、高衡（16ウ）一人に辛勞させて、是を見捨て何と内に入らんや。軍兵共は早く入よ。泰衡は渠と一所に兎にも角にも成るべし」

とて、敢、入べき氣色なし。使帰て此由を申せば、高衡も又両眼より涙をはらゝと流し、甚だ愁ふる色有りしが、態と声を上て、

「高衡討たれても苦しからず。泰衡は大將軍なれば、討たれ玉へては一國の破れなり。人々是非に入れ奉れ」

と下知すれば、各々泰衡が馬の前後に取付、無理に内へ引入りける。泰

衡が志、荒夷とは云乍、優しかりし次第也。斯て軍兵七万余騎程引（17オ）入て、迹に残りし一万余騎は皆是一人当千の者共なれば、高衡此勢を従ひ、鎌倉勢に渡り合ける。鎌倉勢も命を惜まず戦ふと雖、散々に打破られ、右往左往に散乱す。畠山重忠に是を助くべき由仰らるゝ。重忠の曰、

「某承る所の先陣を、一旦の御断りもなく余人に仰付られ候らへば、今日の合戦に於ては面白からず候間、打ちられし二の駆は得仕らじ」とて、敢、動かねば、鎌倉殿も御力に及ばず。其隙に高衡一同にさつと引退く。鎌倉勢是を見て、

「敵、城中に入らば付入にせよ」と（17ウ）云儘に高衡が迹を慕ふ。高衡が云、

「譬へはんぞく王たり共、樋爪五郎高衡が引勢に付入らんとは、蟬が蟪蛄に向ふが如くぞ。引くな」と云儘に、喚て懸れば只一捲りに四、五丁計追ちらし、門を開て入様に、

「懸れゝ」と扇をひらいて招きければ、一人も懸る者なし。此時駆けたらば能かるべきに、恐れて進み得ざる也。和田が曰、

「駆まじき所には駆、進むべき所は進まず。北条の軍の仕様はいかなる事ぞや」

と笑ひける。時政此事を聞きて、

「和田が笑ふぞ。必ず引な」と、義時の方へ云送る。

斯て高衡（18オ）城中に入て、泰衡に向ひ、

「先程は軍なれば態と仰せを謝せずと雖、左程迄不便に思召候上は、高衡身を粉に砕く共、飽足らず候」

と云て、泪だを流しけるとかや。然れば大將軍の情は少にても、士卒に聞への強き事成るべし。

江間義時敗北 父時政憤戦して敗軍の事

并 和田義盛嘲弄する事

斯て高衡槽に上て敵軍を見渡けるに、未、北条勢引取ず、塀下に立並び居ければ、高衡云は、

「敵軍、新（18ウ）手を入替ずして敗軍を進むる事、合戦の法を知らず。然に我頭は花々しき軍せざれば快よからず。仍て一戦美々敷すべし」

とて、羽州勢の新手一万余騎を二手に分け、五千余人を城中に残し、五千余人を引率して、紫地の旗に雀の紋を付、韋駄天の修して真先に押、先に押立、外々の敵には目も懸ず、三ツ鮮（鱗）の旗を目当に驀地暗に駆向ひ、四方八面に追立く切廻る。義時の備、微塵に成て崩れける。義時も是非に及ず退き去らんとしける前に、高衡は余さじと追懸乍放つ矢、義時が乗たる馬の太腹に中り、馬は屏風（19オ）倒しに倒れける。義時真逆まに落けるを、郎等福島何某驅来て引起し、肩に懸て味方の陣に逃入たり。大将、既、斯如くなれば、諸卒も我先にとちりく成て敗北す。

此節、鎌倉殿の下知として、「急ぎ新手を入替よ」との事なれば、土肥の次郎実平、備をくり出す。抑々此実平は異る大名なれば、手勢一万余人有り、其上当時武蔵・相模の御目代成る故、両勢付属しけるに仍て、益々多勢也。然るに此節、高衡は槽の上に引取り、惣門の前を左りへ押行、左りの橋を渡らんとす。此向ふは土肥が陣也。仍て実平も備（19ウ）は立たれ共、互に位を見合せて暫く白眼合けるが、高衡進んで軍を始めける。土肥は名を得たる古兵なれば、備を堅くし高衡が兵を屹と受留たり。仍て高衡が「此備破り難し」とや思へけん、人数を纏へ引か退くを見て、実平備より武蔵・相模の輩四千余人、「高衡を通さじ」と追かけ進んで、槽の向ふへ渡り越て、城兵を散々に討立ける故、高衡又此所を避けて元との槽詰め迄引取りければ、武蔵・相模の輩を見落し、

「スハヤ高衡が退くぞや。逃すまじ」

と、鎌倉勢、勝に乗て進みけり。是を見て高衡は相図（20オ）の太鼓を鳴らしければ、城門を開て新手五千余人、関の声を上て駆出る体に見せければ、鎌倉勢を見て、

「スハヤ城中より新手出るぞや。勢の多少も知らざれば、面々龜忽に進むべからず」

と、猶予する間に、高衡が兵悉く城中に引入て木戸を閉たり。土肥が軍兵共、是を見て、「敵、既、引入たれば、身方も退くべし」とて、橋際迄退く。然るに此橋は繰橋にて、両方に轆を指置、是を抜取る時は一時に崩れ落る様に仕懸置たれば、初めに高衡、土肥が備を駆けちらしたる時、心利たる兵五、六人敵中に紛れ入らせ、橋の此方へ（20ウ）偽引よせ、「時分を見合せ、彼轆を抜取るべし」と下知しける故、今轆を抜ける故、此橋一時にぐわりく崩れて堀の中へ落ちたり。去れば向へ進み渡りたる武蔵・相模の四千余人は、引取事ならずして、外の橋を渡り退かんと馬を引返す所に、城兵槽の上より夥しく松明を投出す故、猛火盛んに燃上て、鎌倉勢は引取るべき様なく、「如何すべし」と狼狽騒ぐ所を見落し、雨のふるが如く射下しけるに、空矢は一筋も勿りし。然るに武蔵・相模の輩、堀へ落入れば死すると知り乍、火と矢に難義して「若しや（21オ）助る事も有るべきか」と、堀の中へ飛入くしけるに、火を通る、者は矢に中り、矢も火も通る、かと思へば、水に溺れ死して四千余の輩一人も通れず人馬共に鑿しにせられける。是皆実平に付属せられし輩也しが、土肥が下知なきに逸り過て斯の如し。去れば、其中に実平が家の子、郎等は一人もなし。

此故に、彼四千余人の父子兄弟親族等、大に憤り、是嘆き訴へしけるは、

「右の内に実平が一門・郎従とては一人もなきはいか成る故や」と訴へ、

「其罪実平に有れば、渠を解死人に給はり、我（21ウ）々が存分に仕度し」

と申故、鎌倉殿も甚だ難義に思へ給ふが、段々糾明せらるゝ所に、彼の四千余人、土肥が下知なきに進みたる事明白なれば、実平は危急の難を通れる。『係る不覚の負軍仕けるは、義時謂れざる先陣せらるゝ故也』と義盛、今日の日記に、

「文治五年四月三日 江間小四郎義時先陣進んで戦利を失ふ」と認めける。北条時政大に憤ると雖、すべき様もなし。

然れ共、時政は面目なくや思へけん、『愚息義時は未だ合戦の場数なければ、軍利を弁へず。但し時は治承（22才）年中、石橋山其外にて奇妙の軍仕たれば、戦ひの道も知りたり。依て重ては時政先手に進んで、高名手柄を顕はし、義時が恥辱をも雪ぐべし』覚悟しけるは、義時敗軍せし事を、義盛難じける故、父の時政二品へ訴へ、先手を乞請、一門は云に及ばず、他家の人をも相催すと雖、義盛、諸勢へ触れけるは、

「此度北条時政謂れなき先手を乞請、詮なき合戦を好まるゝに仍て、彼の手に属して合戦勝利を得ば格別、若し又味方打負て、軍多く損するならば、却て不忠たるべきの条、（22ウ）其心得有るべし」

と、侍処諸士の別当たる義盛触れられる故、誰一人背く者なければ、一人当千の輩、敢、時政に属せず。

扱、又、北条に相伴ふ人々には、仁田四郎忠常、二ノ宮太郎朝忠、曾我太郎祐信、長沼五郎、稲毛三郎、工藤左エ門尉祐経等也。門葉には浅利冠者義遠、豊後守季光等、北条一家数を尽して、其勢都合八万余人、三ツ鮮（鱗）の旗を真先に押立、鯨波を上げれば、城中より是を見て、

「昨日の敵軍、今日も寄せたり」と云。高衡聞て、

第一の大名なれば、望む所の敵也。但し、今日の軍兵、乱矢に射懸る共、身方は曾て弓を引べからず。只々飛込んで撰み討にすべし。勿論、初めは馬武者揃て敵兵の中を堅横に乗り破るべし」と、委細に下知して、歩卒二万人、馬武者八千余人、都合二万八千余人、一同に関の声を上て真一文字駆入く追立ければ、北条勢争かたまるべし。八万余人敵の小勢に駆立られて漂ふ所を、城兵共は右に（23ウ）当り、左に切り廻り、人なき所を往来するが如くに乗破り駆廻りて、百騎共屯をさせず。

此節、高衡は自ら太鼓を打て味方を励しければ、城兵弥々勝に乗て、鎌倉の大軍を少も恐ず挑み戦ひければ、時政が八万余人の大軍、敵を取り巻事叶はず、結局城兵二万八千余人に駆ちらされ狼狽す。乱軍難義に及ぶと雖、重忠を始め、助け救ふ勢一人もなければ、弥々難義の体也。

高衡是を見て、頻りに太鼓を打て駆立ければ、見る間に敗して、時政もすべき様なく、惘れ果、忙（茫）然たる所に、高衡は（24才）手早く人数を纏へ城中へ引入けれ共、一人も付入にせんとしたふ者もなし。斯の如くなれば、時政是非なく本陣に退き、言上すべき詞なき故、巧言を以、

「敵は命知らずの溢れ者なれば、討得ざる事なしと雖、是非に討たんとする時は、身方も多く損する故、詮無き事に存じ、人数を引取りたり」と云。義盛聞て、打笑ひ、

「北条殿の御一戦の体、驚入候。惣じて討安き敵は是を討、又討得難き敵は討取らずとは心得難し。泰衡等は討得難き敵なれば、討たず。然るを強ちに討つ（24ウ）時は、身方多く損する故、人数を引取り給ふとは神妙に候らへ共、凡、戦場に向ふ者、誰か一人命を全ふして帰陣せんと存る者や有べし。国を出る節より妻子を忘れ、家を忘れ、戦ひに臨んで其身を忘るゝは勇士の常也。然るに、味方の損するを厭へ、討べき敵を討たざるは軍道に非ず。但し、北条殿には戦場へ臨んでも生て帰るべし

と思へ給ふにや。左様の御所存故、八万余人の大軍を以、敵三万人にも足らざる兵士に迫立られて見苦しき負を取り玉ふ。此日、義時、合戦の（25才）仕様を義盛難じたるを憤り、今日北条殿老体を厭はず駆向はれたれ共、敗北して結句義時の恥辱を重ね給ふ。惜い哉、時政少の心得違へ故、今の如し。惣じて合戦の習ひ、命を惜み乍高名せんとすれば、是非に勝は得難し。能々後勘有べし」
と申て御前を退去しけるに、時政は一言の返答にも及ばずして、大に赤面しけるとかや。

工藤祐経和田を諷す。義盛直言の事

并 和田義盛合戦勝利の事（25ウ）

爰に工藤左エ門祐経は、窃に北条父子に低語けるに、

「義盛其身弁舌に倣るゝに仍て、貴辺の如き高家を編る事は、全く苗代にする所也。是、偏に、去る頃、義盛天運に叶へ、大鷹宮の辺にて国衡を討取るに仍て、専ら勲功募ると雖、其外には目に立高名、武勇もなく、剩、高衡夜討しける時、我々と共に敗し、又、水にも押流され乍、今の如く悪口する事、口惜き次第也。畢竟、其身、謀才有故、權威に募て『戦場には君命をも用ひざる事有』とて折々は君の仰せを（26才）背き、侍所諸士の別当也とて僻事を行ふに仍て、諸国の輩、恨み疎んで憎む者多し。誠に渠が申如く、合戦させ、是非に勝べくは義盛に此城を攻落させ然るべし」

とぞ申ける。是、偏に祐経も此軍に不覚を取りし故、北条父子へ追従に、聊、思慮なく申けるを、鎌倉殿も尤と思へ玉へしや、

『いかにも義盛左のみ軍功もなくして權威に募り、折々は頼朝の申事も用ひず、才智有に任せて詞を過す。何様一軍させて勝利を得ば味方の幸ひ、若、打負たらんには渠が（26ウ）唇を閉て、其威を折くべし』

と思召、義盛を御前へ召して、

「是迄のごとく城兵毎度勝利を得るならば、何ツの時に攻落すべきや。仍て義盛謀略を廻らして一戦すべし」

と仰せける時に、義盛畏て、

「是全く北条父子の合戦を批判致せし故、何者か御前へ致べしと覚候。扨こそ某に一戦を逃げさせ、自然敗するに於ては御笑ひの種と成さるべしとの為に今の如く御聞有るべし。但し、義盛は敵に勝べき道理、能存じ罷在候得ば、慥に勝申べし。但し、其勝の中に上中下の三段是有候。（27才）此中、何れ也共、君御用ひ有に於、急度、勝を取るべしと存候らへ共、拙、御用ひは有まじ」

と申ければ、鎌倉殿聞玉へ、

「何の様の事にても勝べきの道有るに於ては同意すべし」
と宣ふ時に、義盛云は、

「先、上の勝は、奥羽両州を敵將泰衡に返し与へ、元の如く鎮守府將軍・陸奥守に補任して、君の御家人として万事奏聞を経ずして鎌倉より指揮し給へなば、両州を悉く攻従ひ給ふに等し。泰衡、又、大手搦手の要害攻破られ、此本城に楯籠りて大に氣力を落したれば、（27ウ）只今申し如くにて、召されんには悦んで和順すべし。仮令、当国を悉く攻亡し玉ふ共、泰衡が親族の輩を以、守護職とせずして、外々の者を国の守と仕玉はゞ、当国の人民、是を用ひ申まじ。然れば、同事にて、泰衡を是迄の通り、両国の押領使として鎌倉の指揮に應せしめられば、御家人の内に鎮守府將有らんは、是御誉れ高かるべし。斯申義盛、従五位上、左エ門尉に叙任す。是さひ君の御眉目たり。其外、君の御連枝、三河守殿御一人、従四位少將也。御舅時政だにも未だ受（28才）納せられず。然るに鎮守府將軍を御家人とし給ふは、是全く君の御誉れにして、御子孫に至るまで御名高かるべし。両州を悉く御手に入玉はんより、遙に増るべし。仮令、渠等鑒にし給ふ共、門葉の内、一人を助けて国守と仕玉

はずは、両国の輩、必定従ふまじ。昔より、罪有者を討て、其内一人を残し、助命して一所懸命の地を与へて先祖を祭らする事は、和漢に儘有る法也。君のハケ国領し給ふ時は、六十余州を得玉はん事思へ寄せ玉はざりしを、義盛が力を以、天下の武將に備り(28ウ)玉へば、御心に強慾起り、御手に入れ玉はん事を思召、又、兩州を得させ給はゞ、天竺・震旦をも従へん事を思召すべし。假令、兩州を御手に入る、共、起請文に背て攻取り給ふ上は、天罰御子孫に報へ、全たからじ。君の御心一ツを以、東の果の合戦なきは、兩國迄も騒動して、万民是が為に苦しむは、偏に禹王の末に桀王有り。湯王の末に紂王有り。文王の末に幽王有り。況や君は凡下なれ共、御子孫に如何成る悪人有らんも計り難し。然れば天下の万民を休んじ、御子孫の繁栄を願はん。泰衡に兩國を返し(29オ)玉へ、御家人と仕給ふは是、最上の勝ならずや。

次に中の勝と申は、只今従ひ奉る所の諸軍勢を悉く引率して鎌倉へ帰陣仕給へ。今より七ヶ年を待て当国を攻討たるべし。泰衡は其父秀衡には似べからず。君、軍を返されば、天下の諸武士震ひ動て責来りしかども、攻落し得ず、引取りたる上は、我国いか成る事有共亡ぶ事有べからずと恐るゝ心なく、大に奢侈の心出来て人を人とも思はざる時は、必ず国民恨みて反逆有るべし。其費に乗て是を討ならば亡はさん事、最、安かるべし。是中の勝也。

下の(29ウ)勝と申は、先づ合戦を止られ、此方にも向ひ城を構へて、君も鎌倉へ帰らせ給はず、当国を御在所として五年も十年も敵と白眼み合へ、対陣する時は奥州広しと雖、終に糧尽き亡ぶべし。此三ツの内を御用ひ有に於は、義盛輒く軍に勝申べしと存ずれ共、必定御用ひ有るまじ」

と云。勿論、二品も御心に叶はざれば、重ての仰せに、「是等は皆、戦はずして勝所也。然れば、義盛他人の事は云へども軍して勝べき事は知らざるにや。係る道理は誰々も知るべき事也。義盛駆向

て勝べき有りや。如何ん」

義盛云は、(30オ)

「此外、戦ひを以、勝たん事は時の運によるものなれば、究めて勝べしとは申難し。但し、某一ツの望有り。此義御取上有に於は、いかにも一軍仕るべし」

と云に、二品聞玉へ、

「其望みは、戦ひ勝なば兩州の支配せん事を望まるゝや」

義盛重ねて、

「夢々左様の望にあらず。只々、義盛が口の憎さに『戦ひ挑ませ勝か負るか、御覧有べし』と、君へ進め申輩有べし。然れば、義盛敗するならば、御前に於て切腹仕るべし。又、義盛勝利を得ば、彼の進め奉る所の人々御切腹仰付らるべし」

と云。二品聞し召し、

「是全く、義盛(30ウ)勝利の時は北条・工藤等に切腹すべしとの事成べし」

と思召、頼朝卿驚き給へ、

「義盛は我手足共云人なれば、縦、軍に負たり共、切腹させらるべきや。義盛の望む輩は、誰共知らね共、双方皆頼朝が臣也。殊に義盛切腹する時は頼朝が政事、誰人が助くべし。義盛が申す所、其理有りと雖、斯迄仕寄せたる上は以来の事は兎も有れ、是非に泰衡が首を見ぬ内は、頼朝、更に止み難し。然れば、義盛謀略を廻らし戦ひ挑まずして敵を亡す方便もあらば、偏に義盛を頼る所(31オ)也。夫迎も然るべき目当もなき軍せよと云にはあらず」

と始めに替りたる仰せ也。義盛聞て、

「斯迄思召給ふ上は、是非を申上るに及ばず。然れば、此度に於は合戦の仕方こそ有り。先第一に御計意の宜しからん事は、君御一代は申に及ばず、当国に於、猶、畠山に先手を命じ給へ乍、謂れざる輩、北条父子

へ仰付らるゝに仍て、重忠是を恨み、昨今嘗て働かず。是は重忠余りに穩便過る故也。義盛杯は、一度仰せを蒙りたる先陣を他人に拔驅は致させまじ。畠山常々の器量には似ずして、(31ウ) 余りに穩便過たる致方。却て軍の法を破る。斯如くにては何つ迄も埒明くまじ。又、重忠は定りたる先陣を外人に仰付らるゝは、悪しかるべし。去乍、明日に於ては、義盛暫時先登に進で一軍仕るべし。是偏に、義盛は合戦せずと人々の思はん所も恥かしければ、某が軍の仕様を見て各々手本に致されよ。北条殿父子も能々見置玉へ。但し、義盛勝利する迎も、面々に腹は切らせまじ」と、打笑て御前を退出す。時に二品の仰せに「諸軍勢は義盛指揮して、何程也共召具せられよ」との(32オ) 仰せ也。義盛畏て、

「御勢加へ給ふに及ばず。三浦一党にて不足仕らず」迎、自分の陣所へ歸て手配りを定めけるに、義盛の左り備は土肥次郎実平、同息小早川弥太郎遠平、右備は三浦別当義澄、同息平六義村、中軍の前備は佐原十郎義連、岡崎西四郎義実、其次土屋大学助義清、後備は千葉介常胤等也。義盛が二の目は畠山庄司次郎重忠、其次下河辺庄司行平、其次宇都宮左エ門朝綱、八田太郎朝重、愛甲三郎季隆、吉川三郎惟実、小山左エ門(32ウ) 朝政、結城七郎朝光、笠井三郎清重、伊藤左近將監、横山権頭、本間右馬允、三浦新兵衛尉常盛、古郡保忠、三郎義秀、岡部六弥太忠澄、大川戸太郎広行、熊谷小治郎直家、渋谷次郎国平、平山武者所季重、加藤治郎景廉、天野左馬允遠光以下の輩計り也。他家の軍兵を交へず、皆々一ツの軍兵、都合十三万余也。右の人々は悉く一人当千の侍にて、九十三騎の面々也。去れば鎌倉殿御家人の内にて、名を得たる者は残らず三浦等に有らざるはなし。中にも三浦(33オ) 別当義澄は、義盛には叔父にして悪源太義平十六騎の其一人也。去れば、保元平治の戦ひに名を上たる古兵也。岡崎悪四郎義実、是又義盛に叔父にして、去ぬる轉逆落しの時、故義経卿落し兼て難儀也しに、義実一番に落したる大剛の勇士也。下川辺庄司義清は、日本無双勇士にて関東一の我儘者。朝

比奈三郎義秀は、其力比するに及ばず。何れも撰み勝りたる無双の勇士也。

斯て三浦一党の軍なれば、皆々三ツ引の旗也。此節、義盛は十万余人を後に備へさせ、先手は三万八千人也。此節、義盛大音(33ウ) 声に、「桓武天皇の後胤、高望王の末葉、三浦大助義明が嫡孫、和田左エ門尉義盛、当時鎌倉の執権、侍所諸士の別当たり。城中にて、鬼神と呼ばれし樋爪五郎高衡、陣前に出られよ。一矢進らすべし」と呼はりける。然るに、城中にては、泰衡諸勢に向て、

「今日は三浦一党数を尽して押詰ければ、軍大にむつかしかるべし」迎、樋爪五郎高衡を大将として、三万余人を差添ければ、則、高衡馬を乗り出し、義盛に向て、

「今日は和田先手に進まるゝ上は、我々生前の面目、何事か是に過ぎん。去年以来度々の軍すると(34オ) 雖、未だ曾て礼讓正しき軍せず。然れば今日は相互に礼義の合戦仕るべし」と会釈仕ければ、義盛聞て「尤」と同意して、双方共に士卒を下知して戦ひけるに、高衡陰に閉て掛れば、義盛又陽に開き、三度合はせて三度別れ、豎横に駆廻て挑み戦ふと雖、大将の下知嚴重なれば、敵味方混雑せず。殊に手負、討死も多ふからず。然れ共、軍は六ツかしく、理り成哉、渠は孔明、是は仲達也。偕こそ勝負なし。

然るに、義盛は鎌倉にて八人の射手也。又、高衡は奥羽両州に異る射術なれば、互に引絞りて双方一時に射る。其(34ウ) 矢、両方より行中り、真中に落たり。爰に於、義盛が郎従共、高衡を射落さんと駆向ひければ、義盛怒て、

「汝等無礼也。高衡如き名将を、汝等射ん事勿体なし。義盛相手也」と云て、曾て射させず。又、高衡が郎等も義盛を射落さんとすれば、高衡自分矢面に立塞がりて是を制す。是偏に双方礼讓を守る所也。

然るに義盛は斯く矢軍計りにては勝敗決し難しと、弓矢を投捨ければ、

高衡も同く弓箭を捨て、既に太刀打に成るべき所に、後陣に備へし岡崎悪四郎義（35才）実は、義盛の軍を大事とや思へけん、既、駆出すべき体に見得ければ、泰衡城中より遙に見て、

「スハヤ高衡、敵の大勢に囲まれ討たるべし。急ぎ駆出て助よ」

と下知しければ、城中の大軍、一同に駆出るに、高衡が備混雑して、却て加勢の味方こね返されける故、高衡備を立直さんとする内、義盛下知して、一同に鬨の声を上げて押懸る故、城兵は野白に成て引色に見へける時、右より古郡保忠、左より土屋義清、中の手より三郎義秀等、鉄棒を打振て敵中へ駆入く、当るを幸ひ（35才）打伏せく追立ければ、城兵は右往左往に散乱する故、流石の高衡も城中へ引入りたり。是を見て、軍兵統て付入りせんとするを、義盛制して、

「軍は十分勝也」

とて、人数を纏へ引取て、御前へ参り、北条父子に向て、

「軍は見切り大事也。面々は敵の引入時に無謀に追慕ふ故、却て負を取る也。六分の勝を上とす。勿論、後度の締りと云は、用心して夜討に逢はざる様こそ」

と申ければ、北条父子其外、共に一言半句も出でざりし。二品も「耳目を驚かす所也」と計り仰せけり。抑も今日の軍に（36才）後陣の旗を動しけるは、義実国に杖突老功故也。今日、四月十三日の合戦に奥州始め高衡負軍仕たるに仍て、口惜しき事に思へ、櫓の上に顕はれ、大音に、

「今の戦ひに、身方の多勢邪魔に成て大事の軍に打負、残念なれば、明日又々一軍して勝負を決すべし」

と呼はる。義盛聞て、心得たるよし返答しけり。